二〇一六年六月一〇日

窓繰れば雨が止んだと時鳥　豆狸

点滅の蛍火滲む川面かな　さつき

グーの手の開けば青き梅ひとつ　こすもす

路線バス満員通過青葉寒　なおこ

二〇一六年六月九日

今朝のこと忘るる父と蛍見る　豆狸

露草の瑠璃散らしたる陸墓かな　ぽんこ

米どころ近江は今し麦の秋　ひかり

噴水いま水上バスを弧の中に　菜々

二〇一六年六月八日

城濠へ枝のなだるる若楓　ぽんこ

紫陽花の白きを飾る厠かな　なおこ

おばさんは三代目てふ蓬餅　さつき

と見る間に青田となりて風渡る　有香

駈けまはる吾子を見守る日傘かな　よう子

万緑の森の向かふに湖と空　隆松

二〇一六年六月七日

トンネルを出て目つぶしの新樹光　さつき

合戦のごと向かひ立つ幟かな　まゆ

二〇一六年六月六日

簾越し三味の音洩るる祇園かな　宏虎

万緑や腰掛け石に似し礎石　うつぎ

田植機の泥の轍や里の道　さつき

万緑に尖りし屋根はパン工房　宏虎

たんぽぽや母を座らせ庭床屋　まゆ

二〇一六年六月五日

幼稚園うさぎ小屋にも簾かけ　なおこ

樽舟にじゅんさい採るは未だ少女　智恵子

二〇一六年六月四日

下闇の延命水に行列す　宏虎

夕立あと一人二人と軒離る　ともえ